

# 説 教

竹 内 信

1973年のクリスマスをみなさんとともにお祝いできますのを、うれしく思います。クリスマスのもたらす恵みと祝福が、みなさまおひとりおひとりの上に豊かに与えられますようお祈りいたします。

今年のクリスマスはどういうクリスマスでしょうか？ 我々の生活は最近、なにか暗くて寂しくなってきたような気がいたします。気象の予報では、今年の冬は早くから来て長く続くだろうということです。あらたな氷河時代がおそくとすら伝えられております。なにか薄寒いような感じがいたします。そうした中に石油がだんだんと不足し、ガスや電気などもどういうことになっていくのか。我々は、本当に不安な思いにみたされております。

女子の短大生の方たちといろいろ話をする機会は多いのですが、最近彼女たちの何人かから本当に暗い不安な、恐れおののいているような感じをもっているという感想を聞いて、若い人たちの間にそうした不安がひろがっていることを気のどくに思ったわけであります。こうした中に私たちは、今年のクリスマスをお祝いするわけですが、世の中には、このような寒い暗い時代にクリスマスどころかといったような気持で、このクリスマスを迎えている人も多くあるのではないかと思うのです。そう考えられるのも無理がないとも思われません。

しかし、クリスマスというのはだいたい、暗い寒い時に来るのです。聖書に

書いてあるキリストのご降誕の記事を見ましても、本当に不自由な思いのままにならない騒然たる時代、ヘロデ大王のもとに、イエスはお生まれになりました。ヘロデという人はいくらか良いことをしたように思いますが、彼は自分の王としての立場を守るためにはどんなことでもした人であります。自分の妻のマリアンネを殺し、自分の子供たちを殺し、そうしたことの良心を呵責によって、晩年は精神錯乱し、狂人のようにもだえ苦しんで死んだのです。しかし、彼が死ぬ直前、最後にやったことは、家来に命じてその国のもっとも尊敬されている、人々から慕われている、重要な人物を殺すということであり、殉死のような形で殺すことでもあります。

ヘロデ大王の意図はどこにあったかという点、自分は死んでも誰も涙を流す人はいないだろう、しかしこうした重要な人物が死ぬことによって、多くの人々が涙を流すだろう。知らない人がそれを見て、ああヘロデ王が死んだから皆が涙を流しているのだ、と思うだろうと考えて、このような処置をとったということでもあります。

イエスが生まれたとき、自分の脅かされる数十年先のことを心配して、彼は2才以下の幼児を虐殺させました。そうしたことによって、イエスが生まれた時代がどんなに暗い時代であったかを、みなさんはお察しになるだろうと思うのです。イエスは、こうした人類の歴史においてもっとも暗いとき、神様からおくられてまいりました。この暗い世界に光をもたらすために、イエスは地上においでになったのであります。

このようなことをもっともよく示しているのが、イエス誕生の記事を書いた聖書の話であります。（あるいは）東方からの3人の博士たちがかすかな星の光を仰ぎながらイエスの誕生をお祝いに来た、と書いてあります。また、暗いベツレヘムの郊外の野原で、羊飼いたちがイエス誕生のお告げを聞いておりますが、そのとき天において天使たちの姿が光のうちにあらわれ、彼らのきよらかな讃美の歌がひびいた、とも書いてあります。

イエス誕生の知らせは、こうこうと輝く権力者ヘロデの宮殿において告げられなかった。エルサレムの神殿は電気もなかったときであります、金でつく

った大きな燭台、7本のローソクがともる7つ枝の大燭台、それがソロモンのときには10台も置かれてこうこうと室内を照らしたということでもあります。おそらく照明がそれほど輝いたのは、ほかになかったと思いますが、このようなエルサレム、光輝くところにおいてもイエス誕生のお告げは語られなかった。本当になにも光もないベツレヘムの郊外において、イエスの誕生は告げられた。天使の光のうちに告げられた。

ヨハネ福音書は、闇の中に光が輝いた、と言っている。闇とは、この世界のことです。罪によって盲目とせられた暗黒の人々がうごめいている世界である。光とは、神の恵みの光を地上にもたらし、「我は世の光なり」として我々に光を示されたキリストのことである。キリストはけっして、この世が明かるいからといって、喜こんで地上にこられたのではない。光がないから、照らすためにこの世にきた。クリスマスとはそういうものです。暗いところで正しく守られる良きものであります。

よくキリスト教の雑誌に、思い出のクリスマスのようなものをいろいろな人に語らせている記事が見られるが、そこではいろいろな人が過去の信仰の生涯において経験したクリスマス、もっとも思い出のあるクリスマスのことを話しておられるが、しかしそのような思い出のクリスマスは、そんなに豊かなとき明かるい時代のクリスマスではないようである。私自身も5, 60年、クリスマスの思い出があるが、毎年楽しい印象の深いクリスマスをおくったと思うが、今になってかえりみてどれがいちばん思い出が深いかというと、多くのクリスマスのことは思い出されない。やはり私の目の前に思い出されるクリスマスは、暗い時代のそれです。

私は小学校を出てしばらく北海道で、まだ開拓している頃の農場で働きました。3年ばかりは教会に行くこともできなければ、もちろんクリスマスなどお祝いすることもできなかった。ある年非常に努力してやっとクリスマスの礼拝に参加したことがあります。三つも四つも駅をこえて行かねばならない町まで行って、その教会に参加した思い出があります。雪の深い夜の町を、ザクザクとふみしめながら丘を上っていったのです。目の前に星の形をした光が輝い

ているのに、どんなに感激したことか。その中で歌われる一つ一つの歌がどんなに私の心にしみたか。私は今ありありと思いかえすことができます。

また、戦争中のクリスマスも忘れられないものです。ごちそうもない、プレゼントもない中で、本当に心から喜んでイエスのご降誕をお祝いした情景を、私は忘れることができません。

みなさんでもやはり同じことであろうかと思います。そうした暗いところで本当の光のイエス・キリストをお祝いするということが、大事なクリスマスの守り方であります。今年は寒くて暗い冬かもしれません。けれどもどうかこのクリスマスが、小さい子供たちの心にいつまでも残るような明かるい楽しいクリスマスであるように、どうぞみなさん心を配ってあげてください。

ベツレヘムの郊外で歌われた天の使いの歌声「いと高きところには栄光，神にあれ，また主の喜びたまう人々に地にありて平和」。クリスマスの歌には、この天使の歌がたびたび出てまいります。

私たちがこの歌をよく聞きますが、あまりその意味を考えないことが多いのではないかと思います。立派な宗教音楽にグロリアの部分があって、この歌が合唱されるわけです。すばらしいグロリアの音楽は非常に力強いもので感銘を受けますが、その中で歌われる歌詞にある人は深い感銘を受けることがないことはないけれども、そのようなことは普通は考えないのではないかと思うのです。この天の使いの歌によく注意を払って考えてみますと、非常に深い意味があると思います。これは、単なるハレルヤハレルヤといって神をたたえただけではなく、この歌のことばの中にキリストのご降誕の重要な意義がはっきり歌われているように思います。

だいたいこの歌は、はじめは三つのことが歌われていると言われてきた。天に栄光，地に平和，そして人々に善意。これはギリシャ語のテキストの理解に基くが、英語で1611年に訳された欽定訳には *Glory to God, peace for an earth, good will* の形で翻訳されています。この英訳は350年以上も英国で使われているが、いまだに廃棄されていません。いろいろ新しい訳は出ているが、やはり英国で大事なことになる、この欽定訳が読まれます。女王が戴冠

式をなさるときには、この欽定訳以外の聖書は読まれない。また、あらゆる公式な大事な礼拝のときは、必ずこの古い翻訳が読まれるのです。そして英語を読む人たちの間では、この翻訳がとおっています。生活の中に、にじみこんでいるのです。この栄光の歌にしても、これを三つに分けているのですが、それはまちがいであるように思われます。

この歌は、二つのことが歌われているのです。すなわち「栄光が神にある」ということと、「平和が地上にある」ということであります。この二つが大事なことで、そして地上に住む人々が神に喜ばれる者である、ということです。これが今の翻訳に表われているものです。しかし、もとの三つの讃美が広く普及しているために、いまだにこの歌は三つの歌だと理解する人が世界においては非常に多くあると思います。私どもの日本語の場合でも、文語訳のはじめには、天に栄光、地に平和、人に恵みあれ、と三つのものとして訳されていたと思うが、この文語訳の改訳においては、これは変更されたのです。

このことはユードキアというギリシャ語の問題になるのですが、ユードキアということばは本来、善意 (good will) の意であります。ところが写本の違いで、ユードキアスと後に<sup>あと</sup>sをつけたものが最近はもっとも良いものとされています。ユードキアは名詞です。名詞の場合には、善意ととれます。ところが形容詞ユードキアスとなると、善意の人々というような意味になります。それをいろいろな面からして、我が喜ぶところのもの、我が心にかなうもの、というような翻訳が正しいとして今日用いられているのです。

そんなにも深く人々の心にすみついたものを変えることはおかしなことだと思うが、しかしどうしても変えねばならないと考えさせたのは、同じことばが聖書の大事な箇所に出ているからです。すなわちイザヤ 42:1 に。そこに「我が心にかなう者」ということばがある。そこから新約聖書にとられてきているのです。イエスのご生涯の非常に重要なときに、一度ならずこのことばが用いられております。つまりイエスが洗礼を受けられたとき、天の声が聞こえて「あなたは私の愛する子、私の心にかなう者である」と。この「私の心にかなう者」が、同じユードキアスということばである。もう一つ、山上の変貌のと

き、やはり天からの声として同じことを聞かれたと書いてある。こういうことで、学者たちが検討した結果、Good will towards men（人々に善意あれ）は支持されなくなったのです。そして、この我が喜ぶところの神のみどころにかなう者のいる地上に平和があるように、とこのような形で讚美は「天に栄光」「地に平和」という二つのこと、第2の「地に平和」の内容として、地上に住んでいる人は神のみどころにかなう人だということになっているのです。

けれどもこれもやはり、我が心にかなう者とはどういうことかが問題となってきますが、その場合けっきょくはユードケアスであり善意の人ということになります。善意の人を神は喜びたもう、善意の人が住むところに神の平和が与えられる、ということになるのです。私どもは、「我が心にかなう者」をそのように理解したいと思うのです。そうすれば、この天の使いの歌には、やはり善意が大事なこととして歌われていることを、あらためて考えていわけです。

天に栄光があるということ、これはけっきょく神の栄光が輝くということです。栄光が神にのみあれ、ということが実現することです。キリストのこの地上に来られた一つの大きな目的は、ここにあったのです。栄光がかくれている神のみ姿が現われて、この神に栄光が輝くようになることが、イエスの地上において努力されたことであります。なぜ地上に神の栄光が現われないのか。けっきょくは栄光が神にのみあるはずなのに、人間が神の栄光を先取りしてそれを自分のものにしようとしているところに、神の栄光が輝かないのです。自分のみがもっとも栄光ある者として、人前に示したいということ、それが神の栄光が地上に輝くことを妨げている。本当に天上において栄光が輝くためには、神に栄光があるようにするためには、我々は自分の栄光を捨てねばならない。本当の光栄は神にのみあることを考えて、我々はすべての栄光を神に帰するようにならなければならないのです。

バッハはその音楽のすべてにSDGと書いた、と言われていました。“Soli Deo Gloria” 神にのみ栄光あれ、の記号であります。バッハの音楽はすばらしいものです。しかしそれは、人からのものではない。彼の信仰から出たもの、神に

## 説 教

のみ栄光を帰することを願いながら書いた音楽であります。それが、あの偉大な美しさ、力をもつに至っているのです。ここに神の栄光が輝くのです。

このようなことを人々に示すために、そして本当に神の栄光が地上に輝くために、キリストはこの世において働きそして住まれたのです。本当の神の栄光は十字架において輝いたわけであります。それを思うと、ご誕生のときにベツレヘムの郊外で天使たちが Glory to God「神に栄光」と歌ったその意味は、実に深いものです。

第2に「地上に平和」です。平和については、戦後も非常にやかましく言われてきました。たびたびお話をしましたが、この平和とはやはり、単に戦争がないということではありません。人の心が変えられてその内にあるすべてのむさぼりが取り除かれて、とことん善意が人の心に生きてくるとき、世界に真実の意味の平和がくる。そのことが、この歌の我々に示していることであります。そしてこの降誕において、神の善意が人々に示されたのです。神の愛が示されたわけです。

子どもはこのクリスマスにおいて、神からの善意の賜物を受け取って、それにふさわしい善意の人になるよう心がけねばならないと思います。クリスマスはやはり善意のお祭りです。クリスマスには贈り物をいたします。そして子供たちを喜ばせます。が、そこになにか計算があるでしょうか。あるいはデパートの人たちは考えているかもしれない。みんなに贈り物をする習慣を盛んにさせて、おおいに儲けたいと考えているかもしれません。しかしお父さんやお母さんたちの子供のために用意するクリスマスプレゼントには、そのような計算はないと思います。本当に自分の子供がこのクリスマスに、心から喜んでくれるようにという善意のかたまりが、クリスマスプレゼントでしょう。お互にプレゼントする場合にも、それでなければならぬと思うのです。私はあなたに善意をもっています。お互の善意で交わりましょう。キリストの精神に従っていきましょう、というのがクリスマスプレゼントの意味であります。このような善意が我々の生活においてかき立てられるのが、クリスマスです。クリスマスからこの善意を除いたら、何が残るのか。どんなにきらびやかに飾ったとこ

ろで、いくらごちそうを食べたところで、その根本にあるべき善意がなかったら、クリスマスは実にさびしい冷いものになってしまいます。ひとり子をも惜しまないで人々を愛したもう神の善意。これをこのクリスマスにおいて読み取らねばならないのです。

歌口文子という方<sup>かた</sup>がおられます。この方<sup>かた</sup>は、キリスト教の信者である詩人と歌人<sup>かた</sup>とが出した一冊の詩歌集「はっしゃ」に、詩を書いておられる。この方<sup>かた</sup>は岡山教会の会員だそうで、長い間病気のまま寝たきりの方<sup>かた</sup>であります。けれども、長く歌の勉強をされ良い歌をたくさんつくっておられます。この詩歌集にのせられた詩をご紹介しますと、

キリスト様のお生まれになった日、

こんなめでたい日には、みんなの心がこうもやさしくあたたかくなるのだろうか。 みんなお互<sup>かた</sup>にあたためあおうと、みんなお互<sup>かた</sup>に喜ばしあおうと、どんな苦しい日の中にもこの日だけはそのことばかりを考えている。

世界中の人々がこの日の心をもちつづけることができれば、この世から戦いはなくなるのだらうに。 せめてこの1日、人を喜ばすことだけを考えて本当に喜びあおう。 せめてこの日のためにと親しみあう日、心の内にキリストが生まれたもう。

こうした尊い真理を、長い病床の中にクリスマスの日にこの方<sup>かた</sup>は書かれたのです。我々はこうした方<sup>かた</sup>にくらべれば、もっと感謝すべきことがたくさん神様から与えられています。

どうかクリスマスのときに、本当に人々に親しみ、喜びあい、神から与えられた善意にふさわしい者としてこの日をすごしたいと思います。